

先月11日に終了した県立博物館・美術館の「印象派の誕生」展、4万人を超え入館者があったという。最終日は1時間待ちの長蛇の列、久々に美術館のにぎわいを見る思いであった。開館して4年目、美術館活動が徐々に県民の生活に定着してきた証しといえようか。「印象派の誕生」という明確なコンセプトの下に、80点近い大規模な展示会。展示作品は有名な代表作ではないものの、会場はヨーロッパ近代の黎明期の匂いが充満し、観応えがあった。時代と文化を感じさせる額縁も絵画と一体となり、一瞬にしてヨーロッパ



おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

の美術館に足を運んだかのような体感を味わった。ドラクロワ、ミレー、モネ、ルノワール、ゴッホと美術教科書で見た歴史上の画家たち。「本物の絵に出会いたい」という県民の思いに応えた展示会だったと思う。

展示作品は日本国内の美術館から5点(ルノワール2点、モネ2点、他1点)、そのほかはフランスをはじめポーランドや米国の美術館から借用したと、企画担当の学芸員(文化の杜)は話した。同展は企画展専門会社(本土)の力を得て、広島、愛媛、熊本の県立美術館と連携する形をとったようだ。各県の美術館の運営事情が厳しいとの声が聞かれる昨今。公的美術館の民営化が叫ばれる中で、指定管理会社の専門学芸員の労苦と美術館事情が

学芸員の育成 重視を

想像される。

ところで、あの騒がしかった「県立博物館・美術館長の就任人事問題」はその後どうなったのであろうか。白保台一館長には今後場の美術科教諭を充てる始末である。学芸員の専門性を軽視したお粗末な閉塞人事といわざるを得ない。

できれば、美術品の収集や運営費に困窮している美術館の発展のため、専門の政治力を活かし、「美術館振興基金」を早急に設置して資金集めに努力されてはいかがでしょうか。前館長の牧野浩隆氏は10項目の目標を立て、活動の充実を目指している所に辞令が下されたようだ。項目には美術館学芸員の増員やレベルアップも入っていたようだ。その目標設定は県当局部長の平田大氏(文化観光スポーツ部)には伝わっていないのだろうか。

新年度に入り、ベテラン

学芸員が定年で退き、博物館学芸員が美術館副館長に就任という珍事。さらに美術館学芸員の補充に学校現場の美術科教諭を充てる始末である。学芸員の専門性を軽視したお粗末な閉塞人事といわざるを得ない。

県立芸術大学の美術学科には、美術芸術を研究調査し学芸員や評論家などの専門分野を育てる歴然とした「芸術学専攻」がある。芸術学を修めた若き研究者たちはどこへ行ったのだろうか。彼らは美術館や博物館の学芸員を担う条件がそろった人材である。専門性を活かすべく、当局は彼ら彼女たちを採用し、県外や国外の美術館に県費で研修を積みませ、博物館・美術館のレベルアップを図るべきではないだろうか。

(画廊沖縄代表)